

— 告 白 —

KIT  
キャンパス  
レポート ④  
文・杉村裕之



浦上和也 (うらかみ かずよ)  
金沢工業大学大学院工学研究科  
環境土木工学専攻  
博士前期課程二年  
群馬県立伊勢崎高等学校出身

## アパートで能登半島地震。 災害死を防ぐ使命新たに。

修士論文の追い込みで帰省をあきらめ、大学近くのアパートでパソコンに向かっていた時だった。部屋が音を立てて揺れ、照明がチカチカと点滅した。とっさにもぐり込んだ机の下から出た後も、平衡感覚がずれたような不快感が残った。二〇二四年元日。最大震度7を記録した能登半島地震だった。

「テレビをつけると、ドライプで何度も訪れた奥能登の家々が崩れ、大津波警報が流れていました。自然災害に対する人間の無力さと、防災グッズの用意さえない自身の無防備さをかみしめました」  
浦上さんは、建築や土木資材として幅広く使われるコンクリートを研究してきた。引っ張る力に脆いコンクリートの弱点を補うために、内部に通した補強筋をジャッキで

緊張して固定するプレストレストコンクリートを対象に、補強筋の鋼材と耐食性を調べる。

大学院一年にはKITコーポブ教育プログラムに参加、選抜されて大手ゼネコン鹿島建設の技術研究所に約四カ月、籍を置いた。そして、施工の省人化や工期短縮に貢献する3Dプリンティング用コンクリートの材料開発に、研究員の一人として加わった。

「企業のレベルの高さを肌で感じ、井の中の蛙だった自分に気づくことができました。そんな僕の意見にも耳を傾け、検討する真摯な態度にも感銘を受けました」  
浦上さんを指導してきた宮里心一教授は、プログラム体験の前と後の彼を「後輩への対応や自身の研究に対する姿勢が変わりました。工学技術者とは何かを知る貴重な経験になり、自信がついたように見えます」と評し、目を細める。

宮里研究室では一昨年五月、復興が進む東日本大震災の現場視察に出かけた。研究テーマにしてきた「社会インフラを安心して使うためのメンテナンス技術の開発」に役立てるため、五日間、東北各県の被災地をめぐる。津波から地域を守る防潮堤は、岩手、宮城、福島の三県沿岸で総延長三百九十五キロ、最も高いもので二五・五メートルもあった。

「津波の恐ろしさが迫ってくるよう、社会インフラの土台となるコンクリートの重要性に背筋が伸びました」と振り返る浦上さんは、四月から鹿島建設で働く。一瞬にして人命を奪い、癒えない悲しみを残す自然災害。その悲劇を繰り返さないために、工学技術にもその使命を能登半島地震で改めて刻み、迎える門出である。

**金沢工業大学**  
石川県野々市市扇が丘七一  
電話番号(〇七六)二四八二〇〇